

ジンバブエのエンターテインメント事情 (特集 途上国のエンターテインメント事情)

著者	松平 勇二
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	203
ページ	20-21
発行年	2012-08
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00045830

ジンバブエの エンターテインメント事情

松平勇二



ジンバブエ地図（筆者作成）

「アフリカのエンターテインメント」といえば、やはり音楽や踊りである。ジンバブエ共和国でも、歌や踊りは生活に密着したエンターテインメントであるといえる。

ジンバブエ南部のガンガール村の事例を通して、ジンバブエにおけるエンターテインメント事情について考えてみたい。

●ジンバブエポピュラー音楽

ジンバブエが独立したのは、多くのアフリカ諸国が独立を果たした一九六〇年から二〇年を経過した一九八〇年である。白人の入植がはじまった一九世紀末から、一九八〇年の独立まで、現在のジンバブエ共和国は「ローデシア」と呼ばれていた。独立が遅れたのは、ローデシアの白人が人種差別主義によって既得権益を守っていたためである。

ローデシア時代の首都ソールズベリー（現ハラレ）には、国境や民族をこえた労働者が集まり、黒人居住区に住んだ。黒人居住区において、周辺国の音楽や、西洋の音楽文化が融合してできあがったのがポピュラー音楽である（参考文献①②）。ギターバンドから、民族楽器のアンサンブルまで、様々なポピュラー音楽が生まれた。

現在、首都ハラレでは、冷蔵庫や音響・映像設備などが整ったバーやライブハウスなどが、エンターテインメントの場である。さらびやかな衣装をまとったアーティストが、ショービジネスの世界で華々しく活躍している。

●ガンガール村の民謡

こんにち、ジンバブエの農村部でも、太陽電池や発電機が普及しつつある。水道もガスもない田舎

で、テレビやラジオ、CDやDVDが鑑賞されることは珍しくない。それでも、都市部ではあまり見られなくなった娯楽の風景が、農村部にはある。

二〇一一年六月（乾季）、私はガンガールというシヨナ族（カラング支族）の小さな村を訪れた。ガンガールは、ジンバブエ南部の小都市マシゴ（人口約一〇万人）から、さらに東へ一〇キロメートル行ったところにある。「ガンガール」は岩山の名前である。岩山ガンガールを囲むように民家が並び、村を形成している。

村に着いた翌日、友人のフアライが、村の酒場に案内してくれた。一〇分ほど歩くと、レンガ造りに葎ぶき屋根の丸小屋が二つある民家に着いた。小屋の周りにはオジサン、オバサンが集まり、ワイワイやっている。そこは自家製どぶ

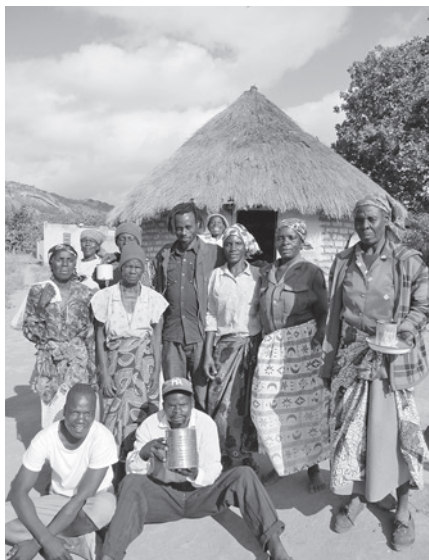
ろく酒屋であった。

私が村を訪れた六月は乾季であった。この地域では五月ごろには収穫を終え、六月はあまり仕事がない。そこで、人々は収穫物で醸造した酒でも飲みながらゆつくりと過ごしているのである。

人々は素焼きのつぼや、ブリキ缶、プラスチックのバケツを囲むように座っていた。容器のなかにはミルクティーのような色の、トロットとしたどぶろくが入っていた。どぶろくは、シコクビエやモロコシの粉で作った粥を発酵させたものである。

酒場についた者は、先着の客全員とあいさつを交わす。全員とのあいさつが終わると酒を飲み始める。金のあるものが酒を買い、みんなで回し飲みする。

私も輪に加わって、酒を飲んだ。少し経つと、ひとりのオバサンが



ガンガーレの酒場にて (筆者撮影)

良い気分になって歌を歌い始めた。すると、それにこたえて周りの人々が歌い返した。いわゆるコール・アンド・レスポンスである。この歌は、この地域の様々な儀礼（葬送儀礼や農耕儀礼）でも歌われる、ゴロンベと呼ばれる民謡のひとつである。コール・アンド・レスポンスが盛り上がってくると、最後にはどこからともなく太鼓が現れ、歌や踊りが始まった。男も女も、ほろ酔い気分で歌い、踊った。

●楽弓と漫談

別の日、友人のフアライは、ある老人の家へ私を案内した。その老人は、「チニヤマザンビ」の奏者であった。

小柄な老人は、推定九〇才、ガンガーレ村民からは、「ゴリアテ爺さん」とよばれていた。

私たちが爺さんの家に到着したとき、彼はすでにチニヤマザンビの製作に取りかかっていた。まず竹のような素材をナイフで削り、細い棒を作成。次にヤシの葉を五ミリメートルほどの幅に割り、テープ状にした。細い棒を反らせ、それにヤシの葉がとりつけられて、楽弓「チニヤマザンビ」の完成である。この弓の持ち手の部分には切れ込みが入れてあり、ギザギザになっている。

爺さんは弓の一端を左手に持ち、もう一端の弦の接合部に口をあてた。そして、右手で木の棒を手にとり、弓の持ち手部分のギザギザをこすり始めた。ギザギザをこする「ギヤギヤギヤ」という音と同時に、爺さんの口から「ワウワウ」という低音の利いた音が出始めた。この低音は、ギザギザをこすることで生まれた振動が、ヤシの葉に伝わり、ヤシの葉の振動が、口のなかで共鳴、増幅したものである。左指と口の形、舌の形で音程を調節することができる。

一分ほど演奏すると爺さんは弦から口をはなし、「おれが惚れたあいつは、実はくいしん坊だった」と言い、また

ギロギロと弓を弾き始めた。聴衆は爆笑。また二分ほど演奏して、「二ワトリも割礼するって知ってるかい?」といって、また弓を弾き始めた。聴衆はまたも爆笑である。このあと、爺さんは冗談を連発して周囲を笑わせた。

●都市と農村の

エンターテイメント

民謡やチニヤマザンビのような娯楽は、どうして都市で見られないのか。

異民族が共生する都市の音楽は、超民族のポピュラー音楽である。メロディや歌詞、楽器は、よりの多くの人々に享受されるべく改良されてきた。一方、ガンガーレの民謡は、村人に幼いころから世代をこえて共有されてきた。チニヤマザンビと漫談は、ガンガーレ村の状況をふまえ、村の言葉で語られるからこそウケる。これらは、村内のローカル音楽、ローカル話芸である。

どぶろく酒場には、言葉や文化の違いがほとんどない。したがって、超民族的ポピュラー音楽を生み出すカリスマ的ミュージシャンも必要ない。農村では全ての住民が歌手であり、聴衆である。彼ら

ゴリアテ爺さんとチニヤマザンビ (筆者撮影)



の一体感が生み出す音楽には、圧倒的な迫力と、故郷の温かさが感じられる。

(まつひら ゆうじ／名古屋大学大学院文学研究科)

《参考文献》

- ①Makwenda, Joyce Jenje. (2005) *Zimbabwe Township Music*. ORT Printing Service.
- ②Turio, Thomas. (2000) *Nationalists, Cosmopolitans, and Popular Music in Zimbabwe*, The University of Chicago Press.

《酒場、チニヤマザンビの映像》
<http://www.youtube.com/user/CHIMURENGAINJAPAN>